北日本新聞
2022年（令和4年）
10月 1日
土曜日

とやま経済

現場探見〈77〉

IT駆使 多品種生産

コンチネンタル 富山市水橋沖

手のひらに乗る小さな筒、自動車の緊急停車時に使う三角表示板のような部品、大人が入れるほど大きな立方体のフレーム…。コンチネンタルの工場には、大きさも形状もさまざまな製品がずらりと並ぶ。同社が手がけるのは工作機械や半導体製造装置、食品ライン向けの鉄やアルミの部品。鋼板からの切り出し、穴開けやプレス加工、溶接まで全工程を一貫して担う。

昨年夏に就任した岡田俊哉社長(39)は「顧客のありとあらゆる要望に応えています。一つとして同じ製品はないんですよ」と話す。1カ月で受注する約4千件のうち、ロット数が1個だけの注文は全体の60%、10個以下は35%を占める。業界内でも珍しい"超"多品種少量生産だ。

◆◇◆◇◆

1991年の創業以来、オーダーメード品の製造に注力。他社が避ける少量の発注にも対応し、実績と信頼を積み重ねてきた。ただ、製品の種類が増えると、作業工程での取り違えやミスが起こりやすくなる。それを防ぐために活用するのが生産管理システムだ。

それぞれの作業所にモニターが備え付けられ、製品に関する情報をシステム上で一元管理する。顧客から受け取った図面や3D化したデータ、作業手順などを一覧できる。さらに実際の工程を誰が担当し、かかった時間も記録される。最終原価と販売額の差を確認することも可能だ。

製品に関する全ての情報を記録して保管することで、問題点や改善策を考える際、感覚ではなく数字に基づいた検証ができるという。蓄積されたデータは会社にとって大きな財産だ。

◆◇◆◇◆

このシステムを導入したのは2000年。岡田社長の父で創業者の岡田幸雄会長(66)が、設備投資との2択からITへの投資にかじを切った。20年以上運用を続けたことで、現場でのシステム入力や確認作業が当たり前になるまで浸透した。岡田社長は「父には先見の明があった。本人は『設備を入れる金がなかっただけだ』なんて笑っていますけどね」と誇らしげだ。

00年に約2億円だった売上高は右肩上がりで伸び、18年には10億円を突破した。近年は新卒採用を始め、立山町に工場を新設。設備と人材の両面で積極的な投資を進める。

創業30周年を迎えた21年には、「コーポレートスローガン「やわらかい鉄工所。」を定めた。岡田社長はこう見据える。「極端な話、鉄より優れた素材が出てきたら鉄工所じゃなくなってもいい。100年続く企業になるため、それくらいの柔軟性を持っていたいですね」

（相川有希美）

隔週土曜に掲載します

さまざまな大きさや形状の製品が並ぶ工場＝富山市水橋沖

昨年秋に新設した立山工場には最新の機械がそろう＝立山町塚越

企業データ

▼本社所在地	富山市水橋沖
▼社長	岡田俊哉
▼創業	1991年
▼資本金	1000万円
▼従業員数	92人
▼売上高	12億9000万円（2022年7月期）
▼事業内容	金属鋼板を使った機械カバーや部品の製造